

大学生の感覚感受性傾向が対人ストレスコーピングならびに居場所感に与える影響

薄 勇樹¹ 浅岡 有紀¹ 逸見 知美¹ 田中 真理¹

感覚の個人差は様々な領域で研究されているが、中でも刺激への敏感さや感受性の高さといった感覚処理感受性 (Aron & Aron, 1997) は精神的健康との関連が示されている。感覚処理感受性の高い人は、外的刺激によって過覚醒状態に陥りやすく不安を感じやすいとされており (Aron, 2010)、アメリカでは15～20%の人たちに見られると推定されている (Kagen, 1994)。こうした感覚感受性の高さは社会的内向性 (Aron, 2006)、抑うつや不安の高さ (Liss, Timmel, Baxley, & Killingsworth, 2005)、自己効力感、疎外感、否定的情動、ストレスの高さ (Evers, Rasche & Schabaracq, 2008)、情緒不安定性や状態不安ならびに特性不安の高さ (船橋, 2013) などと関連があることが示されている。本研究では感覚感受性と対人関係の特徴を明らかにするため、対人ストレスコーピング、居場所感、積極的な他者関係との関連について検討することを目的とした。関東圏内の大学生309名に質問紙調査を行い、261名 (平均年齢20.29±1.35歳) を分析対象者とした。分析の結果、男性のみ感覚感受性高群が低群と比較して、“情動焦点型行動” 得点が有意に高かった。さらに重回帰分析の結果、感覚感受性の高さは、“被受容・安心感” や“積極的な他者関係” に有意な負の影響を及ぼしていたが、“情動焦点型行動” 媒介として心理的居場所感を有意に促進していることが示された。これらの結果から、コミュニケーションへの不安が高くストレスを感じやすい感覚感受性の高さにおいても (Gearhart & Bodie, 2012)、適切なコーピングを用いることで心理的居場所感を高める可能性があることが示唆された。しかしながら、感覚感受性だけではなく性別によってもコーピングに差が見られたことから、今後は性差を含めて検討する必要がある。

キーワード：感覚感受性、居場所感、対人ストレスコーピング、心理的 well-being

問題と目的

例えば、音、におい、皮膚感覚などの同じ刺激に対しても、ある人はあまり反応しない一方ある人は敏感に反応するといったことは、日常的に経験される事象であろう。こうした感覚の個人差に関しては、さまざま領域で研究されているが、なかでも刺激に対する敏感さは精神的健康と関連があるという指摘が明らかになっている。船橋 (2012) はこれまでの感覚の個人差に関しての研究を概観し、子どもの発達における気質研究や、自閉症スペクトラム児の感覚処理に関する研究などが実証的になされているが、一般成人における知覚・感覚研究については、十分にとりあげられてこなかったと指摘している。その上で船橋 (2013) は、感覚感受性の高さを“些細な刺激にも気づき、その刺激に反応し、われわれ人間は刺激に対して慣れが生じるが、たとえその慣れが生じても刺激に対してすぐにまた反応し、その感覚の閾値の変動性がほとんどないこと”と定義し、こうした感覚感受性の高さに関する概念に、Aron & Aron (1997) が提唱した感覚

処理感受性 (Sensory-Processing Sensitivity : SPS) を挙げている。感覚処理感受性の高い人 (以下：高感覚感受性者) は、外的刺激によって過覚醒状態に陥りやすく不安を感じやすいとされる (Aron, 2010)。この傾向は気質の特徴のひとつとされているが、高感覚感受性者はアメリカでは15～20%の人たちに見られると推定されている (Kagen, 1994)。Aron & Aron (1997) は、感覚感受性の高さが、社会的内向性の高さ (Aron, 2006)、抑うつや不安の高さ (Liss, Timmel, Baxley, & Killingsworth, 2005)、自己効力感の低さ、疎外感と否定的情動の高さ、ストレスの高さ (Evers, Rasche & Schabaracq, 2008) との関連があることを示している。Aron & Aron (1997) では、感覚処理感受性に創造性や誠実性、美的感受性などが含まれていたが、船橋 (2013) は感受性の高さそのものを測定するために各感覚器官の知覚と情動および認知の側面に基づき測定尺度の開発を試みている。その結果、感覚感受性の高さは、ビッグファイブの情緒不安定性や状態不安ならびに特性不安の高さと関連があることを示している。加えて臨床的な示唆という観点から、生得的な刺激に対する感受性の高さを自分自身で認めることで自尊心を向上させたり、物理的な環境

1 東京成徳大学大学院心理学研究科

を調整することで、より個人の生活の質を上げることができると結んでいる（船橋，2013）。

こうした刺激に対する過敏性は、物理的な刺激だけではなく、社会との関わり、すなわち対人関係やそれに対する認知に影響を及ぼす可能性は十分に考えられる。例えば、Gearhart & Bodie (2012) は、感覚処理感受性が高いほどコミュニケーションに対する不安が高く、大学でのストレスを感じやすいことを明らかにしている。しかしながら、高感覚感受性者が、実際にどのようにストレスに対処しているかについては検討されていない。

対人関係におけるストレスに関わる諸概念のうち、本研究では対人ストレスコーピングに焦点を当てる。対人ストレスコーピングとは、対人関係に起因するストレスフルなイベントに対する対処方法を意味する。Lazarus らのストレス理論に則り、ストレスフルなイベントをどう認知しどう対処するかそしてその結果どのような影響があるのか、という観点でなされた研究では、対人ストレスコーピングとして、ポジティブ関係コーピング、ネガティブ関係コーピング、解決先送りコーピングの3つの側面からなるとし、これらが友人関係の満足度と心理的ストレス反応に影響を与えていることを明らかにしている（加藤，2001）。また、対人ストレスが生じた場合に、相手との関係を改善・維持しようとするポジティブ関係コーピングは友人関係満足度と正の相関が有意であり、また、問題を先送りする解決先送りコーピングに関しても正の相関が弱いながらもあることを示している。そして、相手との関係を放棄するネガティブ関係コーピングは友人関係満足度と負の相関を示している。

また村山・及川（2005）は、回避的方略が非適応的であるということを実証的に検証し、気晴らしや援助要請行動の回避、セルフハンディキャッピングなどが必ずしも非適応的でないことを示した。これはコーピングの効果に関する研究において、行動レベルでの回避と目標レベルでの回避の違いを示しており、コーピングに関しては行使意図を重視する必要性を指摘しているといえる。

これらの知見に基づき、高本・相川（2012）は、対人ストレスコーピングを、対人ストレスイベントの解決および対人ストレスイベントによって喚起されたネガティブな情動反応の低減を目的とする意識的な認知的・行動的努力として定義し、新たな側面から対人ストレスコーピングについて検討を行っている。対人ストレスイベントを解決するために問題に対して能動的に対処する方法として“問題焦点型対処”，対人ストレスイベントと解決を志向するのではなく、行動によってネガティブな情動反応の低減を目的とする“情動焦点型行動的対処”，同じく対人ストレスイベントの解決を志向するのではなく、認知によって情動反応

の低減を目的とする“情動焦点型認知的対処”の3つの側面から捉えようとしている。つまり、対人ストレスに対しては問題に焦点を当てる場合と情動に焦点を当てる場合、認知的な対処と行動的な対処とを区分したのである。そして、これら3つのコーピングに対して、行使意図を教示文により明確化した上で質問を行っている。具体的には、対人関係のストレスに関して“解決するためにどのような行動をとったのか”〈問題焦点型〉，“気を紛らわせるためにどのような行動をとったのか”（情動焦点型行動），“どのように考えるようにしたのか”（情動焦点型認知）との教示をおこなったのである。こうすることで、感覚感受性の程度により、対人関係におけるストレス時に用いるコーピングの特徴が明らかになると考えられる。

では、感覚感受性の高さは、個人の対人関係の認知にどのような影響を与えるのであろうか。本研究では、個人にとっての重要な他者に関する対人関係における認知的側面として居場所感、加えて他者関係全般の対人関係の良好さについても検討することとする。

まず、“居場所”についてはこれまで、教育実践の場において、いじめや不登校の問題に対する取り組みの一つとし“心の居場所”が提示され、学級の中に身を置きながらも孤独感や疎外感などの不適応感を抱いている児童生徒を支援するための場として保健室や相談室などの居場所を提供されてきた（文科省，1992）。居場所感を測る尺度としては、物理的空間である学校や家庭に注目し、そこでの態度や感情全体を居場所感覚と定義して作成されたものや（岸・諸井，2011）、居場所を環境への適応と考え、居場所があることは人に心地よい感情をうみ、ないことは不快感情を生み出すとしてポジティブ・ネガティブ両面から作成されたものなどがある（大久保，2000）。ここでは心理的居場所感を“心の拠り所となる関係性、および安心感があり、ありのままの自分を受容される場”とし、対人関係に焦点を当てて作成された則定（2007）の心理的居場所感を取り上げることとする。この尺度は“本来感”“役割感”“被受容感”“安心感”の4つの概念からなり、重要な他者に対する居場所感を測るよう作成されている。

加えて、他者関係全般の対人関係の良好さを測定するために、本研究ではRyff（1989）の心理的well-beingを取り上げる。心理的well-beingは、人生全般にわたるポジティブな心理機能とされ6次元で構成されている（Ryff，1989）本研究では中でも、“暖かく、信頼できる他者関係を築いているという感覚”である“積極的な他者関係”（西田，2000）を取り上げることとする。

よって本研究では、刺激への感受性の高さである感覚感受性傾向の高さが、対人関係におけるストレスへの対処ならびに心理的居場所感と積極的な他者関係に

与える影響を検討することを目的とする。

方 法

対象者および手続き

関東圏内の大学生309名に、講義内にて質問紙を配布し協力を依頼した。本研究では大学生を対象にした研究であるため、分析対象者を回答に不備がなくかつ年齢が30歳未満の261名（男性129名、女性132名、M = 20.29, SD = 1.35）とした。

倫理的配慮

この調査は、東京成徳大学大学院研究倫理委員会の承認を得て調査を行った。質問紙の表紙には、質問紙への回答は自由意志に基づくものであること、いついかなる時でも自由に協力の意思を撤回することができること、また、撤回する場合でも不利益を受けることはないことを明記し、質問紙の提出を持ってこれらに同意したこととした。

調査内容

基本属性として、年齢と性別をたずねた。

感覚感受性を測定するために、船橋（2013）によって作成された感覚感受性尺度を用いた。この尺度は、“衣類の素材が合わないとかゆくなる”や“蛍光灯のちらつきが気になる”、“周りの表情や声のトーンなどに敏感に反応する”などの23項目、一因子から構成されている。本研究では、先行研究と同様、（7 非常にあてはまる～1 全くあてはまらない）の7件法で評価を求めた。

対人ストレスコーピングを測定するために、高本・相川（2012）によって開発され、その後高本・松井（2012）によって改訂された対人ストレスコーピング尺度を用いた。この尺度は、コーピングの行使意図によって、“問題焦点型対処”“情動焦点型行動的対処”“情動焦点型認知的対処”の3つの下位尺度、計37項目で構成される。過去1 ヶ月に経験した対人関係のストレスに関して解決するためにどのような方法で対処をしていたか（4 よくとった～1 全くとらなかった）の4件法で評価を求めた。

心理的居場所感を測定するために、則定（2007）によって作成された心理的居場所感尺度を用いた。この尺度は心理的居場所感を“本来感”“役割感”“被受容感”“安心感”の4つの下位尺度、20項目から構成されている。先行研究では、重要な他者として、母親・父親・親友の三者について、それぞれ同一の項目で別々に回答を求めるといった形式で心理的居場所感を測定していたが、本研究では高感覚感受性者の対人認知における心の拠り所となる特定の他者における関係認知を検討するために、最も親しい友人（親友）を思い浮かべてもらふこととした。（5 とてもそう思う～1 まっ

たくそう思わない）の5件法で評価を求めた。

対人関係における精神的な健康も測定するために心理的 well-being 尺度のうち積極的な他者関係を問う6項目を用いた。Ryff（1989）の心理的 well-being 概念及び心理的 well-being 尺度に基づいて、西田（2000）が作成した尺度である。（5 あてはまる～1 全くあてはまらない）の5件法で評価を求めた。

結 果

因子構造の確認

感覚感受性の因子分析（最尤法、プロマックス回転）の結果、船橋（2013）と同じ1因子構造が再現された。同様に、対人ストレスコーピングにおいても高本・松井（2012）と同じ3因子構造が再現され、心理的 well-being でも西田（2000）と同じ因子構造が再現された。よって、この3つの変数は先行研究の因子構造を採用することとした。しかし、心理的居場所感に関しては、則定（2007）では4因子構造となっていたが今回の因子分析（最尤法、プロマックス回転）の結果、分析1回目のスクリーンプロットから2因子構造が妥当であると判断した。また、1回目の分析において“6友人に無条件に受け入れられている”は第1因子と第2因子の負荷量の差が.07と小さかったため除外し2回目の因子分析を行った。（Table 1）。その結果、抽出された第1因子を“被受容感・安心感”，第2因子を“役割感”と命名した。

記述統計と各下位尺度の相関係数

各変数における下位尺度の内的整合性を検討するために α 係数を算出した結果、.77-.97となり、高い内的整合性が確認された（Table2）。次に、各変数における各下位尺度ごとの記述統計と相関係数を算出した。なお、各下位尺度ごとの α 係数と記述統計ならびに

Table 1 居場所感尺度の因子分析結果（最尤法、プロマックス回転）

	因子	
	1	2
被受容・安心感 ($\alpha = .96$)		
13 友人と一緒にいると、居心地がいい	.93	-.13
17 友人と一緒にいると、くつろげる	.93	-.05
3 友人と一緒にいると、ホッとする	.91	-.09
7 友人と一緒にいると、安心する	.86	.00
10 友人と一緒にいると、ありのままの自分でいいのだと感じる	.84	.07
20 友人と一緒にいると、自分らしくられる	.83	.10
15 友人と一緒にいると、ありのままの自分を表現できる	.80	.12
4 友人と一緒にいると、心から泣いたり笑ったりできる	.79	.00
11 友人と一緒にいると、ここにいいたいのだと感じる	.71	.16
14 友人は、いつでも私を助け入れてくれる	.55	-.33
9 友人は、私を大切にしてくれる	.49	-.33
2 友人に無条件に愛されている	.43	-.32
役割感 ($\alpha = .93$)		
16 友人から頼りにされている	-.11	.95
5 友人の役に立っている	-.14	.92
18 友人に必要とされている	.02	.90
8 友人の支えになっている	.06	.82
12 友人に対して、自分しかできない役割がある	.10	.77
19 友人のためにできることがある	.22	.84
1 友人と一緒にいると、自分のことを、かけがえのない人間なのだと感じる	-.19	-.50
因子間相関	F1	-.72
	F2	—

Table 2 下位尺度ごとの平均値・標準偏差・ α 係数と相関係数

	N=261	1	2	3	4	5	6	M	SD	α
1 感覚感受性		-						91.34	21.42	.90
2 対人ストレスコーピング (問題焦点型)		.09	-					35.07	7.30	.90
3 対人ストレスコーピング (情動焦点型行動)		.19**	.44**	-				29.61	5.60	.77
4 対人ストレスコーピング (情動焦点型認知)		.07	.42**	.60**	-			28.77	5.75	.78
5 居場所感 (被受容・安心感)		-.13*	.27**	.26**	.22**	-		46.44	11.14	.96
6 居場所感 (役割感)		-.06	.36**	.29**	.34**	.76**	-	23.84	6.60	.93
7 積極的他者関係		-.14*	.27**	.15*	.14*	.70**	.63**	20.62	4.74	.82

Table 3 HSP2群と性別による各得点の平均値と標準偏差

HSP2群 性別	低群		高群	
	男性(N=70)	女性(N=83)	男性(N=59)	女性(N=69)
問題焦点型	34.01	35.80	35.27	35.49
	8.51	6.73	6.94	6.79
情動焦点型行動	26.83	31.16	29.78	30.88
	5.87	5.19	5.25	4.99
情動焦点型認知	27.29	29.41	29.10	29.39
	5.94	5.81	5.66	5.42
被受容感・安心感	45.63	50.32	43.37	46.35
	10.59	10.34	10.21	12.31
役割感	23.49	25.33	22.42	24.03
	6.09	6.29	6.81	7.03
積極的他者関係	20.93	22.10	18.93	20.41
	4.88	3.98	4.82	4.82

上段:平均値,下段:標準偏差

相関係数を Table2に示した。情動焦点型行動と感覚感受性 ($r = .19, p < .01$), 被受容・安心感と感覚感受性 ($r = -.13, p < .05$), 積極的他者関係と感覚感受性 ($r = -.14, p < .05$), において, ほとんど有意な相関は見られなかった。

高感覚感受性と性別が対人適応に及ぼす影響

感覚感受性得点の平均値を基準とし, それ以上を HSP 高群, それ未満を HSP 低群とした。この2群と性別によって対人ストレスコーピングや居場所感, 心理的 well-being の得点に差があるかを検討するために2要因の分散分析を行った。HSP2群と性別による各変数の平均と標準偏差を Table3に示す。分散分析の結果, 対人ストレスコーピングの3つの下位尺度においては, 問題焦点型は性別 ($F(1,257) = 1.00, n.s.$), HSP 高低群 ($F(1,257) = .40, n.s.$) といずれの主効果も有意差は見られなかった。情動焦点型認知では性別において主効果が有意傾向 ($F(1,257) = 2.91, p < .10$) であったが HSP 高・低群に有意差がなく ($F(1,257) = 1.60, n.s.$), 交互作用は見られなかった。一方, 情動焦点型行動では交互作用が有意であったため ($F(1,257) = 5.92, p < .05$), 単純主効果の検定を行った結果, HSP 低群においては, 男性の方が女性よりも情動焦点型行動得点が有意に低い ($F(1,257) = 21.78, p < .01$) が, HSP 高群においては得点に性別による差が見

れなかった (Figure1)。

また, 男性は HSP 低群よりも高群が情動焦点型行動得点が有意に高く ($F(1,257) = 9.77, p < .01$), 女性は HSP 低群と高群において有意差が見られなかった ($F(1,257) = .09, n.s.$)。居場所感に関しては, 被受容感・安心感において性別の主効果 ($F(1,257) = 7.97, p < .05$) が男性よりも女性が有意に高く, HSP 高・低群 ($F(1,257) = 5.26, p < .05$) では, 低群が高群より有意に高かった。役割感においても, 性別における主効果 ($F(1,257) = 21.78, p < .05$) が男性よりも女性が有意に高かった。心理的 well-being の積極的他者関係では, 性別 ($F(1,257) = 5.25, p < .05$) は女性が男性よりも有意に高く, HSP 高・低群 ($F(1,257) = 10.23, p < .01$) では, HSP 低群が高群よりも有意に高かった。

感覚感受性がコーピングと居場所感に与える影響

第1水準 (感覚感受性)・第2水準 (問題焦点型, 情動焦点型行動, 情動焦点型認知)・第3水準 (被受容感・安心感, 役割感, 積極的他者関係) に変数を整理してパス解析を行った。解析は重回帰分析によって行い, 第1水準の変数を説明変数にして, 第2水準の変数を基準変数にする解析と, 第1水準と第2水準を説明変数と

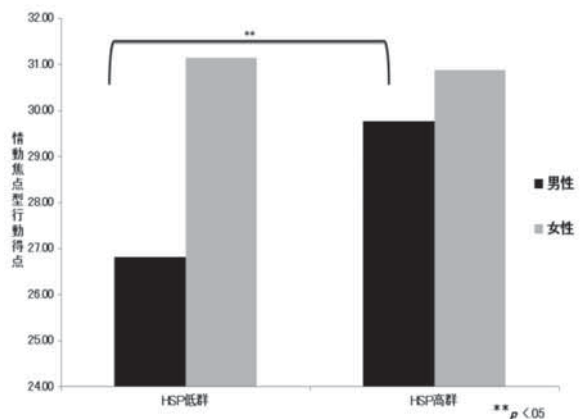


Figure 1 居場所感尺度の因子分析結果 (最尤法、プロマックス回転)

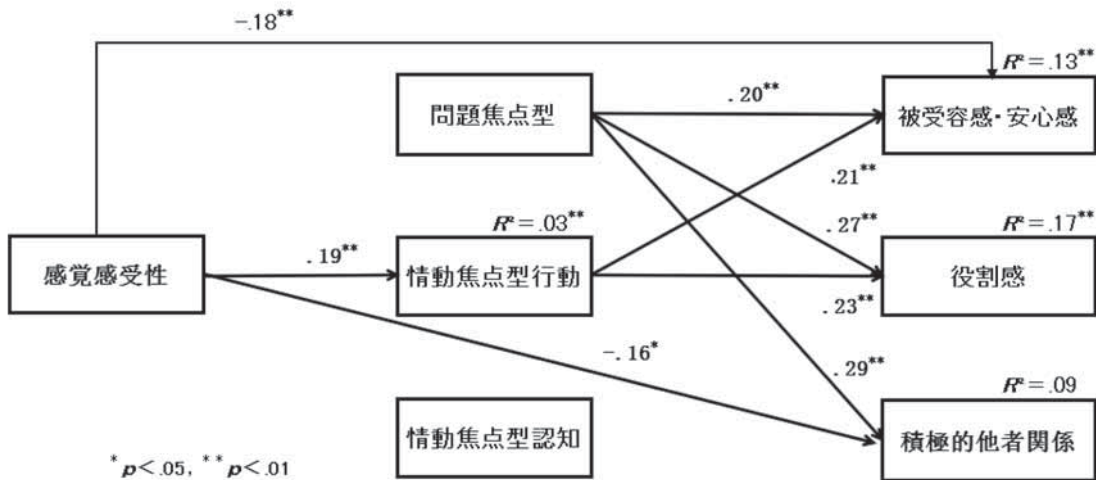


Figure 2 間隔感受性がコーピングと居場所感ならびに心理的 well-being に与える影響のパス図

し、第3水準を基準変数とする解析を行った。結果のパス図を Figure2に示す。

感覚感受性からは、被受容感・安心感 ($R^2 = .13$, $\beta = -.18, p < .01$), 情動焦点型行動 ($R^2 = .03$, $\beta = .19$, $p < .01$), 積極的他人関係 ($R^2 = .09$, $\beta = -.16, p < .05$) が有意であった。問題焦点型からは、被受容・安心感 ($R^2 = .13$, $\beta = .20, p < .01$), 役割感 ($R^2 = .17$, $\beta = .27$, $p < .01$), 積極的他人関係 ($R^2 = .09$, $\beta = .29, p < .01$) が有意であった。情動焦点型行動からは、被受容・安心感 ($R^2 = .13$, $\beta = .21, p < .01$), 役割感 ($R^2 = .17$, $\beta = .27, p < .01$) が有意であった。

考 察

本研究では、刺激への感受性の高さである感覚感受性傾向の高さが、対人関係におけるストレスへの対処ならびに心理的居場所感と積極的な他人関係に与える影響を検討することを目的とした。

“感覚感受性”が“被受容感・安心感”と“積極的他人関係”を低減するという結果から、Aron (2010)の研究に、感覚処理感受性の高さによって外的刺激による過覚醒状態に陥りやすいとあるように“感覚感受性”により不安を感じやすく、社会との関わりや対人関係にネガティブな影響があることが示されたと考えられる。

“感覚感受性”が“情動焦点型行動”を促進するという結果は、“周りの人に慰めてもらおうとした”、“誰かと一緒にいるようにした”、“相手と距離を取るようにした”、“他のことで気を紛らわせようとした”などの項目からわかるように、感覚処理感受性の高い人(高感覚感受性者)が不安や疎外感を感じやすい (Liss, Timmel, Baxley, & Killingsworth, 2005) 特徴をもつため、行動することで緩和しているのではないかと推察される。また、Latack, J. C., & Havlovic, S. J.

(1992)は“情動焦点型行動”に対人接近型行動と回避型行動があると述べており、感覚感受性と外向性や調和性には負の相関がある (船橋, 2013) ことから、“情動焦点型行動”の中でも回避型行動の影響が強くあらわれたと考えられる。

パス解析の結果から、“感覚感受性”が“情動焦点型行動”を促進し、さらに“情動焦点型行動”から“被受容感・安心感”と“役割感”が高まること示された。その反面、感覚感受性から直接“被受容感・安心感”を低減する結果が示されたこととあわせると、感覚感受性そのものは居場所感を抑制する作用をもつが、対人ストレスを感じた後に情動焦点型行動を用いることで逆に心理的居場所感を高めることが可能となるということが明らかとなったといえる。

今回の調査では、“感覚感受性”が“情動焦点型認知”に有意な影響を及ぼさなかった。性差についてみると、“情動焦点型行動”において、女性は感覚感受性の高群低群に有意差がないのに対し、男性は低群が有意に低いという結果から、感覚感受性者の高群と低群男子には対人ストレス・コーピングを取る際の違いがあること、そして、女性には高群低群において、コーピングには差がないことが示されていると考えられる。

引用文献

- Aron, E. N. (2010). *Psychotherapy and the highly sensitive person: improving outcomes for that minority of people who are the majority of clients*. New York: Routledge.
- Aron, E. N. & Aron, A. (1997). Sensory-processing sensitivity and its relation to introversion and emotionality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 345-368.
- Christopher C. Gearhart & Graham D. Bodiea

- (2012). Sensory-Processing Sensitivity and Communication Apprehension: Dual Influences on Self-Reported Stress in a College Student Sample. *Communication Reports* Vol. 25, No. 1, pp.27-39
- Evers, A., Rasche, J. & Schabracq, M. J. (2008). High sensory-processing sensitivity at work. *International Journal of Stress management*, 15(2), 189-198
- 船橋亜希 (2012). 感受性の個人差に関する研究の概観 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 11, 29-34.
- 船橋亜希 (2013). 成人用感覚感受性尺度作成の試み 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 12, 29-36.
- Kagan, J. (1994). Galen's prophecy: Temperament in human nature. New York: Basic Books.
- 岸加奈子・諸井克英 (2011). 女子大学生における居場所感覚 - 大学と家庭という心理的空間 - 同志社女子大学生生活科学, 45, 20-28
- 加藤 司 (2001). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, 49, 295-304.
- Latack, J. C., & Havlovic, S. J. (1992). Coping with job stress: A conceptual evaluation framework for coping measures. *Journal of Organizational Behavior*, 13, 479-508.
- Liss, M., Timmel, L., Baxley, K. & Killingsworth, P. (2005). Sensory processing sensitivity and its relation to parental bonding, anxiety, and depression. *Personality and Individual Differences*, 39, 1429-1439.
- 文科省中学校課 (1992). 登校拒否 (不登校) 問題について - 児童生徒の (心の居場所) づくりを目指して (学校不適応大作調査研究協力会議報告) - 教育委員会月報, 44, 25-29
- 村山 航・及川 恵 (2005). 回避的な自己制御方略は本当に非適応的なのか 教育心理学研究, 53, 273-286
- 西田裕紀子 (2000). 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究 教育心理学研究, 48, 433-443.
- 大久保智生 (2000). 心理的居場所に関する研究 (2): 居場所感尺度作成の試み 日本教育心理学会大会発表論文集, 42, 161
- 則定百合子 (2007). 青年版心理的居場所感尺度の作成 日本教育心理学会総会発表論文集 (49), 337.
- 高本真寛・相川充 (2012). 行使意図を明確にしたコーピング尺度の開発と妥当性の検討 心理学研究, 83, 108-116.
- 高本真寛・松井 豊 (2012). 対人ストレス・コーピング尺度の改訂と妥当性の検討 筑波心理学研究, 44, 39-47.

-2015. 1.30受稿、2015. 3. 7受理-

Effects of sensory-processing sensitivity on Interpersonal stress coping and a sense of " Ibasho " in university students.

Yuki USUKI (*Graduate School of Psychology, Tokyo Seitoku University*)

Yuki ASAOKA (*Graduate School of Psychology, Tokyo Seitoku University*)

Tomomi HENMI (*Graduate School of Psychology, Tokyo Seitoku University*)

Mari TANAKA (*Graduate School of Psychology, Tokyo Seitoku University*)

The purpose of this study is to clarify the correlation between sensory-processing sensitivity (SPS) and the trait of interpersonal relationship by examining the relationship between SPS, coping withfor interpersonal stress events, the sense of " ibasho" and psychological well-being. The data obtained in the investigation of 261 university students revealed the following: the highly sensitive male group demonstrated significantly high scores in "emotion-focused behavioral coping" compared to the low sensitivity male group. A multiple regression analysis indicated that, high SPS had a significantly negative influence on "sense of perceived acceptance and relief" and "positive relationship with others," but it exhibited a positive influence on "sense of ibasho" in mediating "emotion-focused behavioral coping." These results suggest the possibility of enhancing a sense of "ibasho" for highly sensitive people by using appropriate coping mechanisms, as they tend to be anxious about communicating with others and are easily stressed. We should further examine this data in the future considering the observed gender differences in coping

Key words: sensory-processing sensitivity, Ibasho, Interpersonal stress coping, psychological well-being.

Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University

2015, Vol. 15, pp.139-145